福井市立郷土歴史博物館
Fukui City History Museum
展示解説シートNo.135

令和2年秋季特別展

北陸の古刀

●会　場　2階 企画展示室
●会　期　令和2年10月10日(土)
～11月23日(月・祝)

今から1,000年余り昔、平安時代後期に生まれた日本刀は、はじめ大和・山城（現在の奈良県・京都府）といった政治の中心地や備前（現在の岡山県）・奥州（東北地方）といった良質の鉄産地に近い場所で製作されました。しかし13世紀頃から海運などの流通が発達したことにともない、原料となる鉄が他の地方でも入手できるようになったことで、全国各地に刀工が分散し、新しい刀剣の産地ができたと考えられます。

越前（現在の福井県北部）ほか北陸地方の各地でも、南北朝時代以来、いくつもの刀工集団が活躍しました。「北国物」と呼ばれた彼らの作品は、一部を除き備前や相州など、古来の刀剣産地の作品と比べて知名度も評価もあまり高くない傾向にありますが、独特の地鉄の風合いとすぐれた技術で、時の権力者の愛蔵品となったもの、近代以降、美術的価値の高さを認められ文化財指定等を受けたものも数多くあります。

本展では千代鶴派、藤島派、敦賀鍛冶など中世の越前で活躍した刀工を中心に、近世に隆盛する新刀にもつながっていく北陸の刀工たちの足跡をたどっていきます。

第1章　越前・若狭・加賀の古刀

鎌倉末期から南北朝時代にかけて（13世紀後半～14世紀はじめころ）は、戦乱が続き刀剣の需要も高まった一方で、その材料となる鉄素材の流通にも大きな変化があったものと考えられており、古代以来の刀剣の産地である畿内や瀬戸内、新興産地の相州鎌倉などから各地に刀工が分散し、新しい刀剣の産地ができました。北陸地方でもちょうどこの時期に、歴史上はじめて刀工たちが活躍を始めています。

北陸地方の中でも越前（福井県北部）では、比較的早くから複数の刀工集団が活動していたようで、京から移住したとされる千代鶴派、大和の影響が強い藤島派、同じく大和から移住したとされる浅古当麻、敦賀から美濃に移って関鍛冶の祖となったとされる金重の一派など、各地で多彩な顔触れが見られます。ただこれらの刀工も遺されている作品は多いわけではなく、その実態は必ずしも明らかではありません。

加賀（現在の石川県南部）でも越中則重の門人といわれる真景が貞治年間（1362-1368）の銘のある作を遺しているほか、室町時代はじめころに越前から移住したとみられる藤島派が比較的多くの作品を遺しています。また家次、勝家など「加賀青江」と呼ばれる一群の刀工も室町後期を中心に活動しています。

若狭（福井県南西部）で活動した刀工のうち、永正年間（1504～21）ころ相州鎌倉から若狭小浜へ移住した冬広は長く続き、江戸時代までの代々の作品が多く遺っています。また冬広一派は若狭から山陰・山陽地方にも広がっており、幕末に至るまで系譜をつらねています。

刀　無銘　伝千代鶴（切先部分）（個人蔵）

第2章　越中の古刀

13世紀初頭に活躍した鎌倉の名工・正宗にならぶ存在として、越中国（現在の富山県）では則重、また少し遅れて郷（江）義弘が出ています。

「北国物」の中でも別格とされるこの2人と越前敦賀の金重は、古来「正宗十哲」と称され正宗の高弟とされていますが、現在では「正宗十哲」そのものの実在は疑問視されています。ただ正宗とほぼ同時期に活躍し、その影響を大きく受けているのは間違いないでしょう。

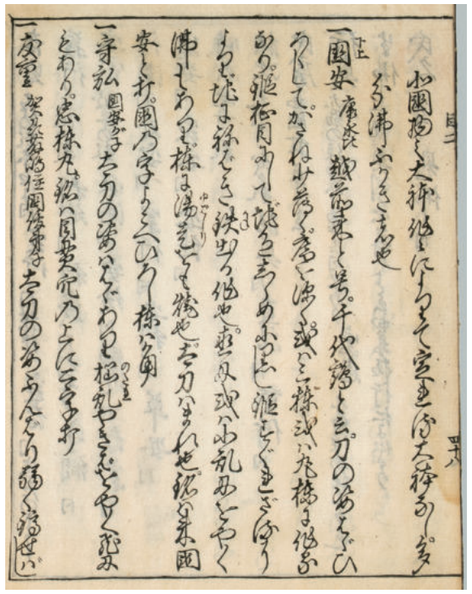
則重・義弘と同じく13世紀初めころに、古入道国光を祖とする宇多派が大和国（現在の奈良県）より移住したと伝わり、その後も越中で長期間にわたって活躍しています。宇多派の作は従来則重・義弘に比して概して評価が低い傾向にあるものの、近年これが見直されつつあります。

太刀　銘　宇多国光（切先部分）（一般財団法人秋水美術館所蔵）

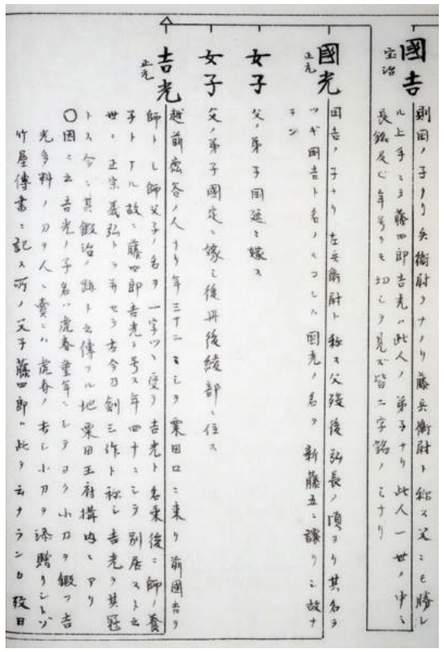
第3章　刀剣書にみる北国物と藤四郎吉光越前出身説

天下三作にも数えられる、鎌倉時代中期（12世紀後半）に活躍した京の粟田口派の名工、藤四郎吉光について、江戸時代の刀剣書には越前（福井県北部）の出身であるとするものが複数あります。その中には出身を越前とするばかりでなく、より細かい経歴について記すものもあります。これら刀剣書が拠ったであろう史料は現在失われており、また現地でもそのような伝承の存在は確認されていないので、その根拠は不明のままですが、全くの創作と切り捨てる前に、わずかにみられる手がかりの人名・地名について検討してみたいと思います。また、古くからの刀剣書に見える「北国物」についての記述も見ていきます。

短刀　銘　吉光
（名物秋田藤四郎）
（京都国立博物館所蔵）



『古今銘尽』（万治4（1661）年版・部分）（刀剣博物館所蔵）
北国物についての記述部分。「北国物の大体作々によりて定れる大体なし、多分沸ふかき者也…」



『刀剣正纂』（文久2（1862）年／明治38（1905）年写・部分）（刀剣博物館所蔵）
粟田口派の系譜の部分。吉光について「越前鹿谷ノ人ナリ年三十ニニシテ粟田口ニ来リ、前国吉ヲ師トし師父子ノ名ヲ一字ツヽ受テ吉光ト名乗…」とある。

第4章　そして新刀へ

これまで紹介した各地の刀工たちは、あるものは集団として栄えて各地に広まり、あるものは1代～数代限りで衰退していきますが、17世紀初頭以降、時代が移り変わり、再び新しい刀の産地がかたちづくられていく中で、これら古来の系譜をもつ刀工たちがその原動力となった例も多くあります。

越前では16世紀末に美濃国（現在の岐阜県）関から移住した「越前関」とよばれる一群の刀工が、越前の戦国大名・朝倉氏の城下町であった一乗谷などで活躍し、その後近江国（現在の滋賀県）から移住したと考えられる刀工の集団、下坂派と合流して一大刀工集団となったと考えられています。加賀では藤島派の流れをくむ清光などが名工を輩出し、系譜を連ねています。若狭を出自とする冬広の系譜は各地に移住して栄えており、江戸時代にも安芸や出雲などでその系譜を追うことができます。幕末の松江藩お抱え工で名手として名高い高橋長信は冬広十七代を名乗っています。新しい時代を担っていったこれらの刀工たちの作品をみていきましょう。

脇指　銘　越前一乗住兼則
神祇五位大祐卜部定澄
（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館所蔵）

同時開催中の展示（あわせてご覧ください）

企画展　勇壮のよそおい－甲冑・陣羽織・火事装束－

1階　松平家史料展示室　令和2年10月10日（土）～11月29日（日）

展示解説シートNo.135　令和2年10月10日発行
福井市立郷土歴史博物館
福井市宝永3-12-1　電話 0776－21－0489
Fax 0776－21－1489
担当：松村 知也
印刷：小川印刷株式会社

日本の刀を知ろう！

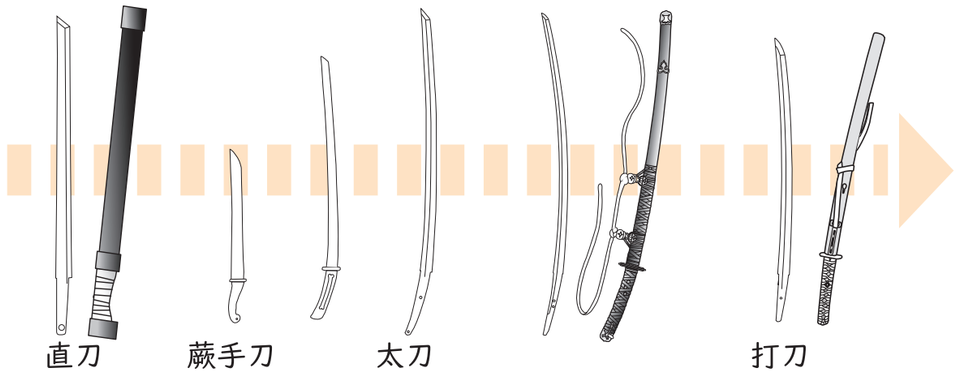
日本刀の形のうつりかわり

日本刀は我が国を代表する鉄の芸術として認知されていますが、そもそも古代にさかのぼると、そのルーツは朝鮮半島にあり、古墳時代の刀は反りのない、いわゆる「直刀」が一般的でした。

それが平安時代には日本刀独特の「反り」のついた「太刀」とよばれる優美な姿に変わります。関東・東北地方の蝦夷との戦乱がつづいたころ、蝦夷が使っていた「蕨手刀」という反りのある刀に影響を受け、馬上でのいくさにあわせた形状となったといわれています。

室町時代には、馬上より徒歩での戦いが主流になり、それにあわせて刀の長さが短くなるなどの形状の変化が起こります。腰から提げて身につける「太刀」と異なり、時代劇などでおなじみの、腰帯に差して使用する「打刀」の登場です。

このように、時代の変化に敏感に対応し、武器としての刀の形状もさまざまに変化しました。



日本刀の分類

日本刀には形や長さによって太刀、打刀(刀)、脇指、短刀といった種類があります。また広い意味では、槍やなぎなた、剣なども同様に日本固有の製法で作られたものとしてその範疇に入ります。

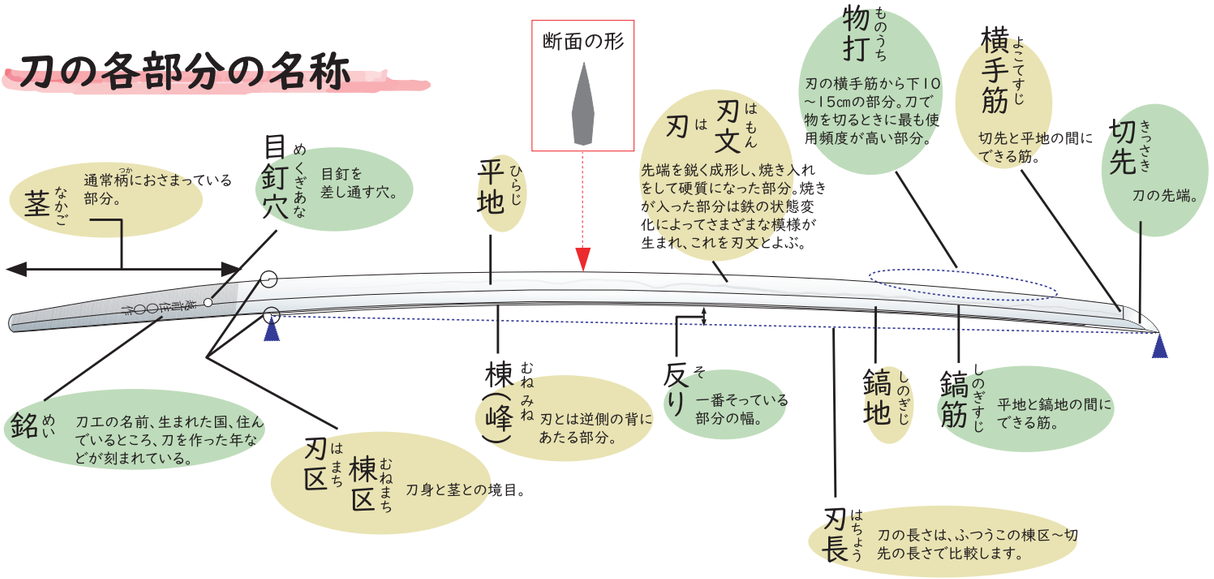
【太刀】 みなさんが美術館や博物館でご覧になる時、刃を下にして展示してあるのが太刀で、平安時代後期に生まれ室町時代初めころまで一般的に用いられた。腰に吊るして用いたもの。反りが強く、刃の部分の長さが70cmをこえる長いものが多い。

【打刀(刀)】 太刀に代わって室町時代中頃から主に用いられるようになる。長さは太刀よりも短いものが多い。太刀とは逆に刃を上にして腰に差す。刀掛けに置く時、展示する時も刃を上にして置く。もともと太刀として作られたものを茎の部分を削ったり切断したりして短くする(磨上という)ことにより、打刀として用いたものもある。

【脇指】 現代では刃の部分の長さが1尺(30.3cm)以上～2尺(60.6cm)未満のものを脇指と呼ぶ。桃山～江戸時代(今から約400年前)は「大小」といって主武器の刀と予備武器の脇指を一組にして身に着けることが一般的になったが、このころの脇指には上記のサイズのものが多かったため。ただし「小脇指」と呼んだ短い脇指や、逆に「寸延び短刀」といって1尺より少し長いサイズで短刀と同様の形状のものもある。

【短刀】 刃の長さが1尺未満のもので、「腰刀」とも呼ばれた。

刀の各部分の名称

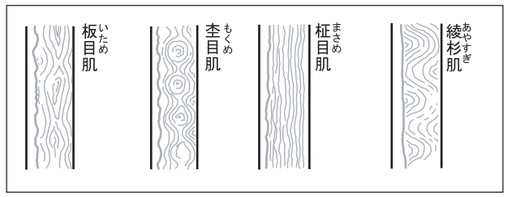


日本刀のみどころ

①鍛え

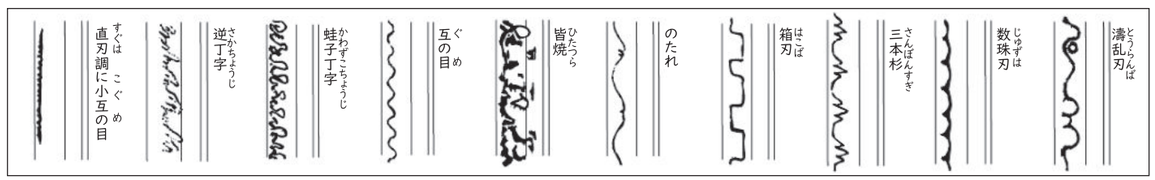
日本刀は良質の鋼を用い、熱して8～15回くらい叩き伸ばしては折り返して鍛錬されます。

「鍛え」とは地鉄のことで、鋼そのものの性質と、その鋼を折り返し鍛錬することによって刀の表面に現れて見える模様を総合したものをいいます。模様がはっきり出ているものを「肌立つ」といい、鍛え目が細く密着しているものを「肌がつむ」といいます。それらには大別して「板目肌」「杢目肌」「柾目肌」「綾杉肌」などがあります。ちょうど木材の板に見られる木目によく似ています。



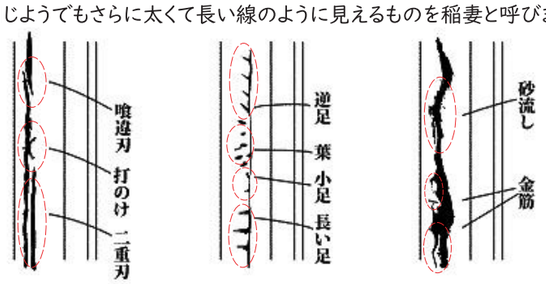
②刃文

刃文は焼入れの際に刀工が任意の模様になるよう、焼刃土という粘土を荒仕上げした刀身にへらを用いて薄く塗ることで、急冷した際のに温度変化の違いが生じて現れる鉄の組織変化です。焼刃土の塗り方によって、直刃や乱れ刃などさまざまな刃文の形が決まります。刀工の技量や作風がはっきり現れる、決して失敗が許されない重要な工程であり、結果生まれた刃文は刀の大きな見どころとなります。



③沸と匂

日本刀の工程の仕上げに近い段階で、任意の刃文にするため粘土で「土置き」し、熱した刀身を水で急冷する「焼入れ」を行います。このときマルテンサイトという組織が形成され、その集合が刃文として現れます。刃文の地と刃の境目などにひときわ明るく輝く粒子状の物が見られますが、肉眼で丸い粒状に見えるものを「沸」、夜空の天の川のようにぼうっと霞んで見えるものを「匂」と呼んでいます。

④刃中の働き

「働き」とは地鉄や刃文の中に見られる変化です。その形状によって足・逆足・葉・砂流し・打のけ・金筋などと表現します。例えば、刃文の中の沸が筋状につながって細い線となり、一層輝いてきらりと光って見えるものを金筋といい、同じようでもさらに太くて長い線のように見えるものを稲妻と呼びます。